東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

［研究ノート］教育的役割の作品：「唱歌」が担った明治期のジェンダー教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下道, 郁子, Shitamichi, Ikuko メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1461

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

研究ノート：教育的役割の作品

−「唱歌」が担った明治期のジェンダー教育−

下道　郁子（音楽教育学）

はじめに

2021 年度の博士共同研究のテーマ「作品とは何か」について、筆者は専門の音楽教育学という立場から考えてみたい。授業では「教育的役割の作品」をタイトルに、バロック～ロマン派にかけての「練習曲」の発展について発表したが、本稿では明治時代の日本の唱歌に目を向けて、議論する。

日本の唱歌教育は、その源流は西欧にあるが、日本で独自の発展をとげ、中国をはじめ東南アジア諸国の教育のみならず、政治的、社会的、文化的にも多大な影響を与えた。その教育的目的の為に作られた「唱歌という声楽作品」の数の多さもさることながら、現在でも歌い継がれている愛唱歌の存在がある。とりわけ明治時代という唱歌教育黎明期の唱歌は、西欧諸国の原曲に日本語の歌詞をつけた替え歌があり、さらに日本の唱歌が東南アジア諸国の言語による歌詞を伴った替え歌へと発展するなど、教育的声楽作品としてのグローバルな意義を持っている。本稿では時代を明治期に限定し、明治維新後の日本の近代化における教育に、当時としては斬新であった西洋式の声楽作品である唱歌が、どのような役割を担っていたのか、考察していきたい。

I　明治期のジェンダー教育

本稿でジェンダー教育を副テーマとするのは、昨今のジェンダーへの関心からである。持続可能な開発目標 SDGs の目標 5 に「ジェンダー平等を実現しよう」がある。ここで示されたターゲットの内容は、主に女性差別をなくし、社会参画やリーダーシップの機会の確保である。第 9 番目に「ジェンダー平等の促進、並びに全ての女性および女子があ

らゆるレベルで能力を強化できるよう、適正な政策及び拘束力のある法規を導入する」[1]とあるが、日本は男女平等指数では 153 カ国中 121 位と先進国では最低水準、女性の社会参画の遅れが問題視されている。

このようにジェンダーギャップを指摘される日本だが、歴史を振り返ると日本は教育においては、1872(明治５)年の学制発布から女子教育を始めている。学校制度が整備される中で、男女別学が原則とされ、女子に帝国大学への進学は認められず、これを教育機会の不平等を意味する女性差別という考え方もある。一方で教育課程に違いを設けることは、男子と女子を異なる教育方針で育成すという考え方ともとれる。本稿では、この男女別学の教育制度を差別ととらえず、ジェンダー教育として捉える。次項からは、明治５年の学制で小学校の一教科として定めれられた「唱歌」が、明治期のジェンダー教育にどのような役割を担ったかを、教材として編纂された唱歌集の「唱歌」という声楽作品を通して考えていく。

Ⅱ　ジェンダー教育の教材としての声楽作品−唱歌

当初、唱歌教育は女子を対象とする計画であった。江戸時代までは、歌の習い事は女子のものと考えられ、男子への教育効果は考えられていなかった。この音楽を学ぶのは女子という従来の習慣を破ったのが、伊澤修二（1851-1917）である。彼は唱歌を男女のへだたりを超えた国民の形成に必要と考えていた。しかし国民の形成に唱歌は必要だが、国民としての役割は、当時は明らかに男女では別であった。明治期は、それまでの江戸時代の武士道や儒教の価値観を踏襲しながら、近代日本における、新たな男性国民像及び女性国民像が創出されていく時代であった。

Ⅱ－1　『小学唱歌集』

伊澤修二は男女共通の教科である唱歌の教科書として、1882（明治 15）年に『小学唱歌集』を編纂する。この中には当時の日本が求めた、男性国民像及び女性国民像をうたった唱歌が含まれている。佐藤は男性国民像としては第２編（1883）の《遊猟》《皇御國（すめらみくに）》、第３編(1884)の《古戦場》《小枝》《忠臣》をあげている（佐藤 2019:149）。そして女

[1] 「SDGs CLUB　17 の目標」 https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/5-gender/

性国民像としては初編（1881）の《若紫》《大和撫子》、第３編の《才女》《母のおもひ》をあげている（前掲書:153）。

《皇御國（すめらみくに）》を例に、男性国民像がどのように作品に纏わされたか見てみよう。この作品は伊澤修二の作曲である。ヨナ抜き音階を用いた順次進行のメロディで、４分音符に歌詞を載せた単調な歌で、小学生向きの教材作品である。一方で加藤司書(1830-1865)と里見義(1824-1886)による歌詞は、忠臣愛国をうたっている。幕末の勤皇改革派の首領であった加藤司書が詠んだ歌からとった１番は、「武士の勤めは如何なるものか、誠意をもって天皇と親につくすことである」という問答である。里見義の２番の歌詞は第１行目で「すめらみくにの、をのこらは」と日本男子に呼びかけ、困難にも挫折せずに、国と国民を富ますために励めとうたっている。

次に《才女》を例に、原曲が外国曲である声楽作品に、日本の女性国民像がどのようにうたわれているか、考察する。原曲は“Annie Laurie”でスコットランドの民謡として知られている。原詩は W.ダグラス William Douglass 1672-1748)で、曲を付けたのは A.スコット Alicia Scott（1810-1900）である。原曲であるスコットランド民謡をもとにした音楽は、ローレライという美女への想いを表現した原詩に相応しい、優美な音楽となっている。当時の日本人が作曲した唱歌とは、楽譜を見ただけでも、その違いは一目瞭然である。８度音程の跳躍から始まる旋律で、各フレーズは弱起で始まる。跳躍音程があるわりには、ゆったりとした動きの曲である。

原曲はスコットランド中に知られる伝説の美女への想いをうたっているが、日本の《才女》は、紫式部（生没年不詳）と清少納言（生没年不詳）をうたっている。共に一条天皇の中宮に女官として仕え、才学と徳を備え、心ゆたかな女性として、歴史に名を馳せた「才女」である。

１番では紫式部の「言語、文章の美麗なるを花に見立て云う」と『小学唱歌集評釈』（旗 1906:18-19）に解説があり、紫式部の文才を讃えている。２番は、清少納言が、皇后が込めた白楽天の古詩に機敏に応え、しかも口に出さずに利発な振舞をしたとことは「千歳の後なる今日に在りても其の事を思ふごとに納言の風災が眼前に見ゆるような心地せらる」（前掲書：22）と解説があり、清少納言の機才を褒めている。

Ⅱ－2　『小学唱歌』

伊澤修二が編纂した唱歌集には、東京音楽学校を辞めた後に編纂した『小学唱歌』（1892-1893）がある。第１巻（明治 25 年）－第６巻（明治 26 年）の６冊から成る。第１・２巻は尋常小学校用、第３・４巻は高等小学校女生徒用、５・６巻は同じく男生徒用と、高学年では男女別に編纂されている。高学年になれば、当然男女で声域にも変化が生じるが、『小学唱歌』の女生徒用と男生徒用は、共通曲も多く、身体的な発達段階のために分類したというより、それぞれのジェンダーの構築を目指した歌詞の歌が数曲掲載されている。例えば第３巻の《松下禅尼》(鈴木弘恭［1844-1897］作詞、山田源一郎［1870-1927］作曲）（譜例１）は『徒然草』の「相模守時頼の母は」を題材にした歌である。天下人を息子に持つ母が、障子の破れているところだけを切り貼りし、息子に倹約や物事を丁寧にすることを教える姿をうたっている。曲はヘ長調で 4/4 拍子、リズムは４分音符と２分音符からなり静的で、旋律は順次進行のなだらかな動きである。８小節＋８小節の２部形式で、西洋音楽形式の曲である。

第６巻の《軍艦》（鳥山啓［1837-1914］作詞、山田源一郎）（譜例２）の歌詞の内容は皇國を守るために軍艦で戦う様をうたった軍歌であり、後に瀬戸口藤吉(1868-1941)が曲をつけて《軍艦行進曲》(1900)として広く知られるようになった。《軍艦》は 3/4 拍子で付点のリズムが多用され躍動的である。1 オクターブ以上、上昇して下降するという旋律線によるフレーズが２回繰り返して８小節の小楽節となり、それを３回繰り返す aba の３部形式である。付点のリズムが基調のいわゆる軍歌調で、力強い曲である。

Ⅱ－3　男子教育の始まり『中等唱歌集』

1889(明治 22)年に東京音楽学校によって発行された『中等唱歌集』は、男子教育の為に編纂された最初の唱歌集である。まず発行の背景となった、当時の教育に関する法令を概観しておく。1886（明治 19）年、初等・中等・高等の学校種別を規定する勅令の一つとして、第１次中学校令が公布された。これは中学校の性質を、実業に就くものと、帝国大学へと繋がる高等の学校に進学するものとに分け、前者は尋常中学校、後者は高等中学校とした。この法令で、後述する高等女学校は尋常中学校の一種と明文化された。唱歌が学科としてあったのは尋常中学校であるが、高等中学校でも唱歌をうたったという記録はある[2]。

[2] 例えば第一高等中学校では予科第二級に唱歌の授業が行われたことや、兵式体操で軍歌を加え正科としたという記録がある（第一高等学校 1939）。

『中等唱歌集』の掲載曲は 18 曲、大半が外国曲に歌詞をつけたものであり、中でも《埴生の宿》は有名である。巻頭 1 曲目は《君が代》で日本国を歌う《紀元節》《天長節》と続く。第 6 曲の《矢玉は霰》は伊澤修二の作曲である。2/2 拍子で前半は付点リズムを多用した軍歌調の曲である。歌詞は《埴生の宿》の訳詞をした里見義で、銃弾が霰のように降る中を前進して命を捨てて戦う意気込みをうたっている。歌詞に詠まれている「ますらを」「御國の民」といった言葉は、男性に求められた国民像である、勇壮な護国の精神を表現していると言えよう。

外国曲に歌詞をつけた作品にも「男性らしさ」は現れている。第 10 曲目の《御國の民》の原曲は当時のアメリカの国歌“Heil Columbia”《コロンビア万歳》(1798)で、原曲は ドイツ系アメリ人の Philip Phile (c.1734–1793) の作曲である。3 部合唱の賛美歌スタイルの楽曲であるが、2 小節単位で繰り返されるクレッシェンドとディクレッシェンドは、雄雄しく、凛々しく、音楽的というよりは、厳粛で儀礼的な曲調である。作詞者は不明であるが、「國のためつくせ」「矢玉ふるなかも怖れず進め」と護国のために戦う気概をうたっている。

第 14 曲目の《火砲の雷》(譜例 3)の原曲は当時のドイツの愛国歌”Die Wacht am Rhein”（1854 ラインの守り）である。歌詞は里見義で、ドイツ語の訳詞ではなく、作詞したものである。「矢玉の雨ふる」「おそるな国民」「日本男児まもれり」と、やはり護国の精神をうたい、「日本男子」と武士道から派生した男性らしさが、軍事的に有用な人間といったイメージを醸し出している。

原曲は K.ヴィルヘルム Carl Wilhelm（1815-1873）の作曲で、4 部合唱曲である。アウフタクトで始まる旋律は付点のリズムを伴いながら、最低音の変ロから階段状に上昇し、最高音は二点ヘまで到達、音域が広く、壮大で力強い音楽である。4 部合唱のハーモニーはコラール風で、荘厳な雰囲気さえ感じられる。

Ⅱ－4　女子教育の始まり『女學唱歌』

『女學唱歌』は 1900（明治 33）年に女子教育の為に編纂された最初の唱歌集である。ここでもまず、発行の背景となった、当時の教育に関する法令を概観しておく。

高等女学校という名称が初めて現れたのは、明治 24（1891）年の改正中学校令においてであった。男子の中学校に対応する女子の中等学校であることを法制の上で明らかにした。その後 1895（明治 28）年の「高等女学校規定」において、高等女学校がどのよう

な教育を行う機関であるかを明示し、男子の中学校の学科課程が、国語および漢文、外国語、数学中心であったのに対して、高等女学校の学科課程は、家事および裁縫を中心とした。学科名称も、男子の中学校の倫理、博物、物理および化学、唱歌に対して、修身、理科、音楽とした。

1889(明治 32)年に中学校令から分離し独立した高等女学校令が公布されると「高等女学校ノ学科及其程度ニ關スル規則」で音楽は必修科目となる。当時の文部大臣であった樺山資紀（1837-1922）の説明からも「賢母良妻」「優美高尚ノ気風」「温良貞淑ノ資性」「生活ニ必須ナル学術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス」（文科省 HP　高等女学校令の制定）と、女子の高等普通教育が中流以上の家庭の女子の教育であり、学術とともに技芸が重要視されていたことがわかる。

『女學唱歌』(1900-1901)は女学校用の唱歌教材で、２集から成る。第１集(1900)は 30 曲、第 2 集(1901)は 22 曲収録されている。編者の山田源一郎の作曲作品の他は、モーツアルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1792)、ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)、メンデルスゾーン Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847)、ブラームス Johannes Brahms (1833-1897)等西欧の作曲家の曲に大和田建樹(1857-1910)、武島羽衣(1872-1967)、中村秋香(1841-1910)らが作詞をしている。《愛國》《女のかがみ》といった、当時の国民に求められた像が、如実に表現されている題名の曲もある。

本稿では第１集から《琴の音》（大和田建樹作詞、メンデルスゾーン作曲）と第２集から《なき父母》（大和田建樹作詞、ベートーヴェン作曲）を例に考察する。

《琴の音》（譜例４）の原曲は“Lerchengesang” op.48-4（ひばり）で、詩はドイツの詩人ウーラント Johann Ludwig Uhland（1787-1862）である。高野辰之(1876-1947)の邦訳による合唱曲《おおひばり》が良く知られているが、最初に日本に紹介されたのは『幼稚園唱歌　正編』(1892)の《春の歌》である。 『女學唱歌』の《琴の音》はヘ長調、4/4 拍子で、３度音程を基本とした二重唱になっていて、音楽的には原曲から大きな変化はない。しかし、大和田建樹の詩は、原詩の雲雀の様子をうたったものとは全く変わってしまっている。

1　松風か、夜あらしか、あわれあの聲は、
　　月しろし、風きよし、
　　たかき琴のしらべ、

いづくよりかひゞく

２　鈴蟲か、松むしか、とほきあのこゑは、
露さむく、夜もふけぬ
あやし笛のしらべ、
門のかたにひゞく

夜の音風景が、風や虫など自然が奏でる音を主体に叙情的にうたわれ、「琴」「笛」といった楽器が詠まれている。女学校では「音楽」は必修科目として重視されており、また琴などの技芸は女子のお稽古事として行われていた。メンデルスゾーンの曲にのせて、明治の女性に求められた風情や嗜みがうたわれ、女学生のための教材となった例である。

《なき父母》（譜例５）の原曲はベートーヴェンの交響曲第２番ニ長調 Op36 第２楽章である。緩徐楽章の牧歌的で叙情的な、美しい旋律である。旋律だけでなく、ハーモニーも転用して、3 部合唱の楽曲となっている。歌詞はやはり大和田建樹である。１番は亡くなってしまった父と母を、花が咲いて鳥が鳴いて巡ってきた春に、恋しく想う様、２番は父と一緒に愛でた糸萩、母と一緒に聞いた虫の音を、楽しく懐かしむ様がうたわれている。亡くなった両親との日々を愛おしく思い、季節や自然に重ね合わせる情緒に溢れた「女性的」な歌と言えよう。ベートーヴェンの楽曲が女学生のための教材となった例である。

『女學唱歌』の「序」で伊沢修二は「將來一般女學生の音樂の趣味をも一變して優秀の氣品を養成するを得ん」と女学生への唱歌教育の目的を述べている。『女學唱歌』第２集には「附録　練習課」という音程練習の課題がついている。このことからも、女学生には、西洋音楽の素養を知識と技術の両面から習得することを課し、そして「音楽趣味が優秀で気品なものに変わる」ことが、女性国民像として求められたと考えられる。

Ⅱ－5　比較考察

以上、明治期の初等、中等教育で使用された音楽教科書である唱歌集から、各校種において、出発点となる唱歌集より代表的な曲を選んで考察を行った。歌詞には、顕著に男性国民像及び女性国民像が現れていた。まず歌詞であるが、男性は「護国」がキーワードで

あり、自己犠牲、勇敢、勤勉が詠まれていた。一方女性は、質素で献身的な母、四季を愛でる感性、文才、機才、両親への想いなど、樺山文相が提唱した「賢母良妻」「優美高尚ノ気風」「温良貞淑ノ資性」が詠いこまれている。

次に音楽面を考察してみよう。初等教育段階では単調なものが多く、目立った特徴は見い出せなかった。しかし中等教育になると、注目すべき違いが現れていた。男性国民像育成の唱歌には、護国のために命がけで戦う国民としての気概を鼓舞するような、いわゆる軍歌調で単純な付点音符のリズムを用いながらも、旋律が上昇下降しながら、力強く、前進するエネルギーを感じさせる曲調が考察された。

一方女性国民像育成の唱歌は、西洋の名曲を原曲とした音楽的に洗練された芸術的な曲が転用されることが多かった。そして穏やかで美しいという表現が相応しい優美な曲調が考察された。

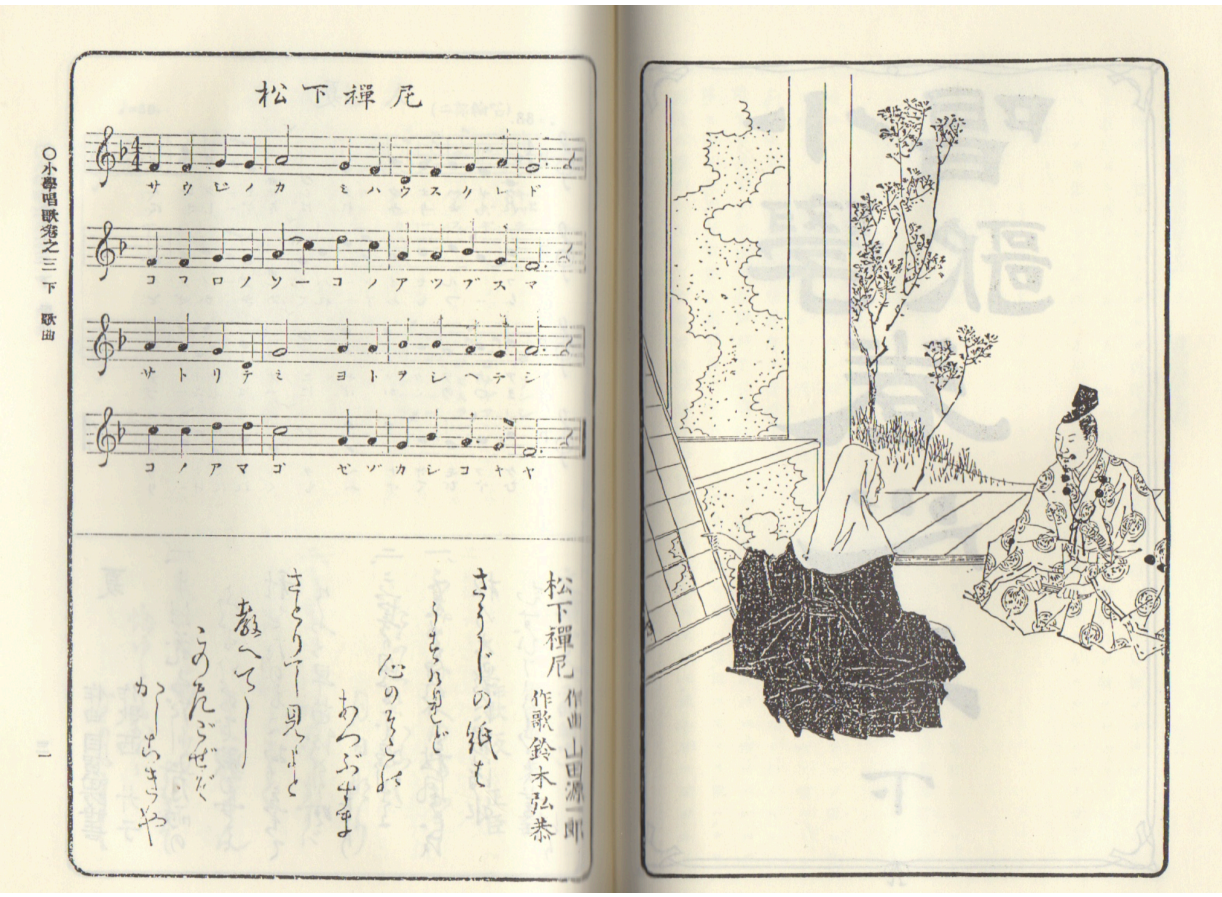
まとめ

明治５年の学制発布とともに着手された唱歌教育は、近代日本が目指した男性国民像及び女性国民像の育成の役割の一端を担っていたことがわかった。そして唱歌教材の中には、ジェンダー教育を目的とした声楽作品が作られていた。この「ジェンダー教育を目的とした声楽作品」とは、つまり声楽作品に、歌詞と音楽の両面から、男性、女性というジェンダーを纏わせることでもあった。

冒頭にも述べたように「ジェンダー」はグローバル社会における主要な問題となっている。開国した明治期の日本が、世界へと向かって進出する近代化の波の中で、ジェンダー教育が重視されていたこと、そしてその実践のために、歌という声楽作品が活用されていたことは、注目に値する。ジェンダーを纏わされた作品は、「ジェンダー」について再考しているグローバル社会に生きている私達に、多くの示唆を与えてくれる。

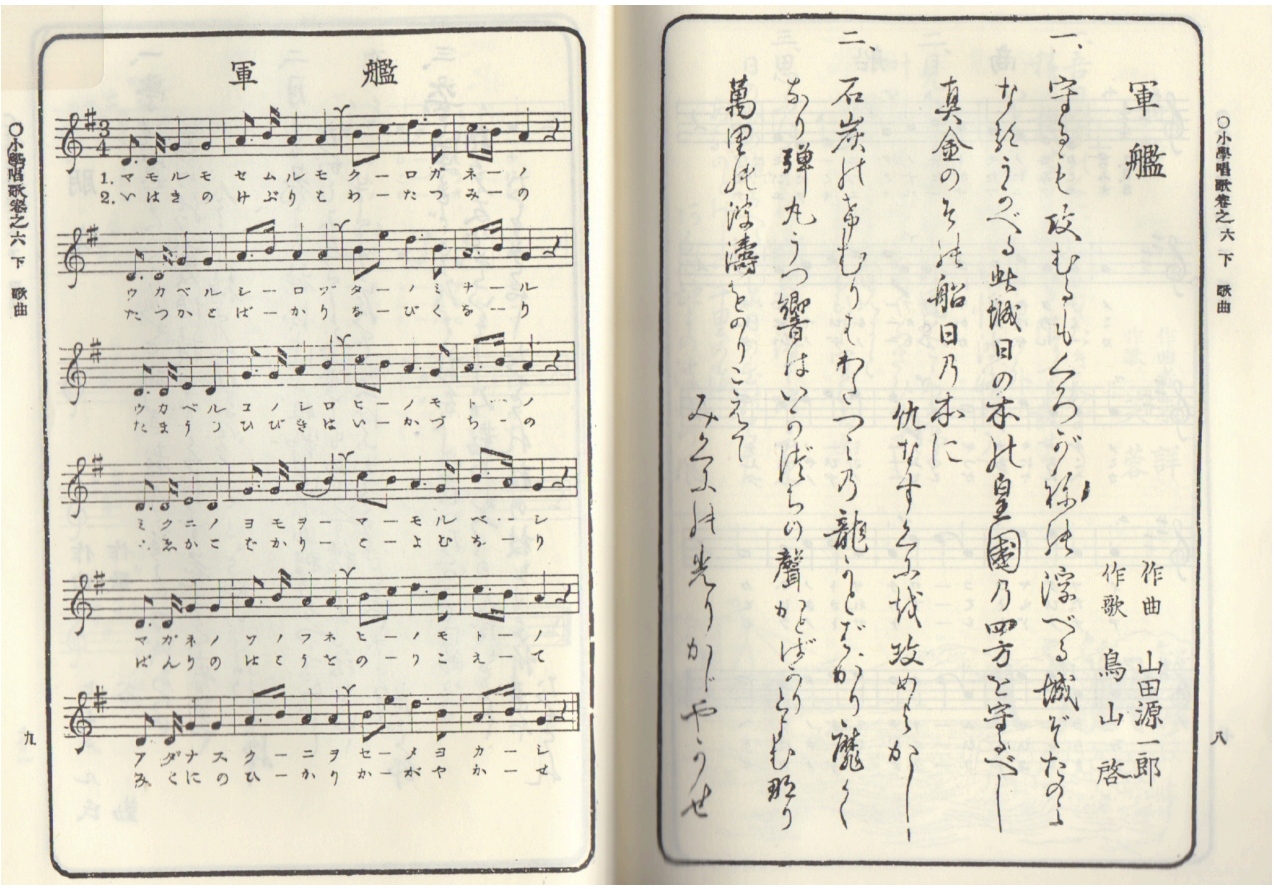
譜例1

《松下禅尼》『小学唱歌3』p.1

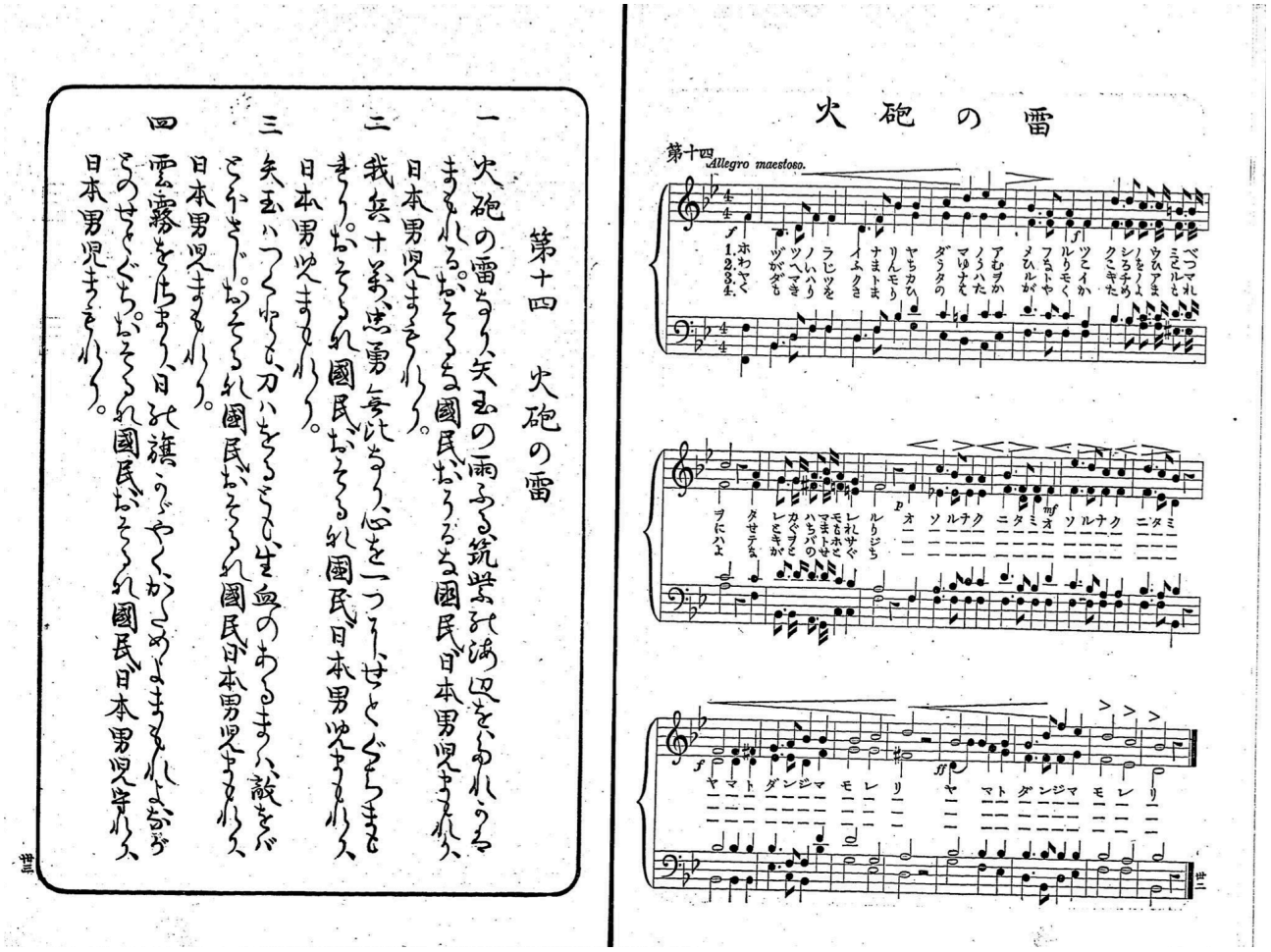


譜例2

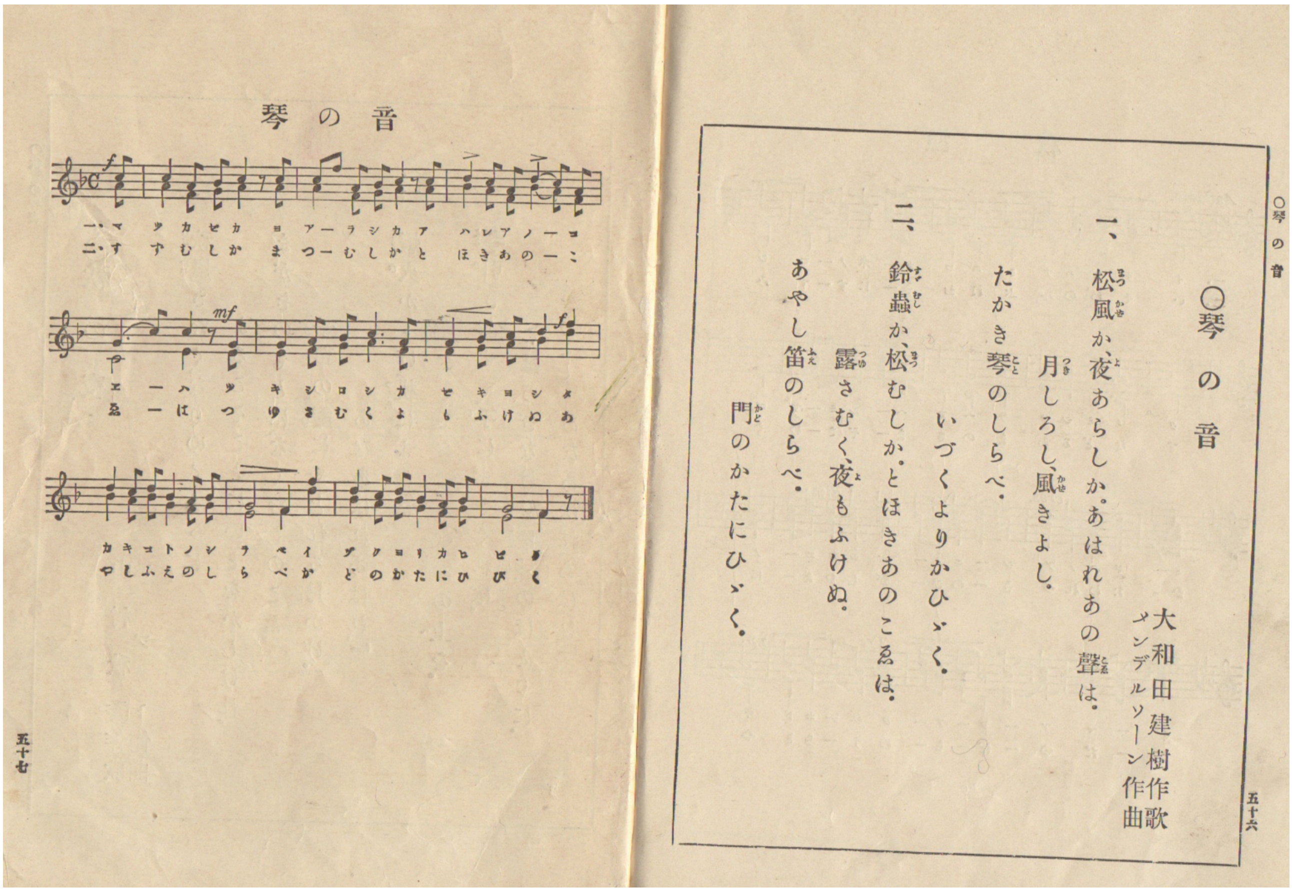
《軍艦》『小学唱歌6』p.8-9



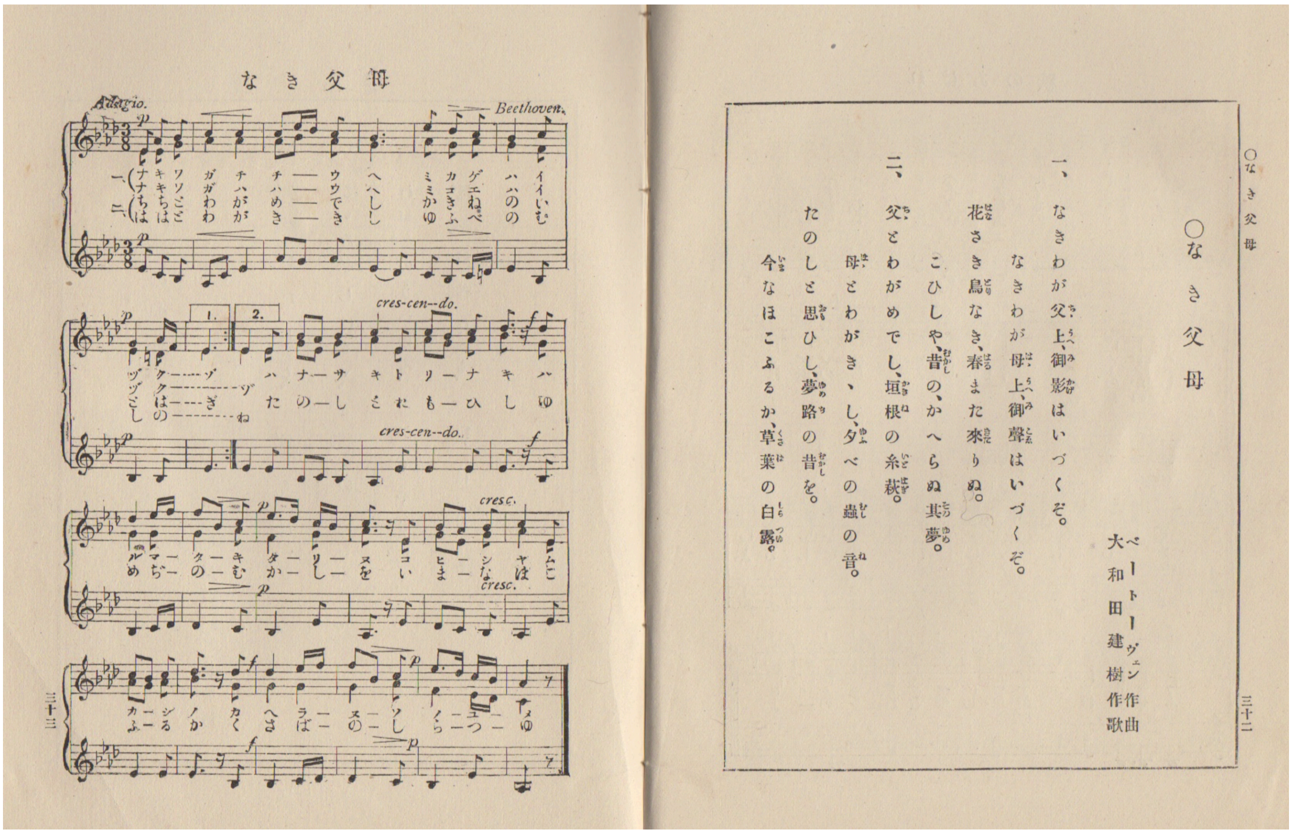
譜例３
《火砲の雷》『中等唱歌集』p.42-43



譜例4
《琴の音》『女學唱歌1』p.56-57



譜例5
《 亡き父母2》『女學唱歌2』p.32-33



【参考資料】

石原和三郎編　1905 『小学唱歌集註釈』 東京：普及舎

江崎公子編　　「小学唱歌(1)-(6)『音楽基礎研究文献集』第 17 巻 東京：大空社

外務省　ホームページ

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/goal5.html

佐藤慶治　2019 『翻訳唱歌と国民形成—明治時代の小学校音楽科教科書の研究—』福岡：九州大学出版会

第一高等学校　1939　『第一高等学校　六十年史』東京：一高自治寮百年委員会

東京音楽学校　1889 『中等唱歌集』東京：甲乙部図書

日本経済新聞　「男女平等指数、日本は過去最低の 121 位　政治参画遅れ」2019 年 12 月 17 日 https://www.nikkei.com/article/DGXMZO53440060X11C19A2EAF000/

旗野士良（桜坪）1906 『小学唱歌集評釈』東京：同文館

文部省音楽取調掛　1881 『小学唱歌集　初編』東京：大日本図書

文部省音楽取調掛　1883 『小学唱歌集　第2編』東京：大日本図書

文部省音楽取調掛　1884 『小学唱歌集　第3編』東京：大日本図書

山田源一郎編　1900 『女学唱歌1』東京：共益商社

山田源一郎編　1901 『女学唱歌2』東京：共益商社